５杉総高第１６９２号
令和６年３月２９日

令和５年度 東京都立杉並総合高等学校 学校経営報告

校　長　決　定

１　今年度の取組状況と取組目標に対する自己評価

自己評価の基準：【Ａ】十分達成できた　【Ｂ】概ね達成できた　【Ｃ】あまり達成できなかった

（１）学校経営・組織マネジメント

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア　学校組織マネジメントを意識した学校経営　【Ａ】	① 企画調整会議を中心に、各分掌の様々な業務の「見える化」を図ることにより、全ての教職員による学校の取組内容の把握及び学年との情報共有と協働体制を確立する。 ② 学校経営計画と個人目標の整合性を図ることにより、課題の共有と学校運営への参画意識を醸成する。 ③ マンパワーに頼ることなく、組織として課題解決に向けた業務ができるような計画的な人材育成と人材配置を行う。 ④ 効率的な予算編成並びに執行、及び施設・設備の定期的な点検並びに不備な箇所の早期発見・早期対応を行う。 ⑤ 教職員の勤務時間の負担軽減を考慮した働き方改革を推進する。 ⑥ 教育公務員としての服務規律の理解と自己の点検を促すための校内研修、学校事故を未然に防ぐための校内研修を実施する。 ⑦ 創立20年の節目を迎えるにあたり、生徒が活躍する場を創出し、学校を元気にするための周年行事を実施する。	① 企画調整会議及び職員会議資料に本校の課題を提示し、それを共有すると共に、それを克服するための方策について、意見を出し合える場をつくった。 ② 学校経営計画と個人目標を実現させようと努力しているベテラン・中堅教員の意見に耳を傾け、それを学校経営に生かすと共に、やる気のある若手に活躍の機会を与え、助言しながら人材育成を図った。 ③ 企画調整会議及び職員会議において、早急に取り組む案件を期限と共に示し、分掌や学年が方策を立案できるようにした。 ④ 中・長期的な視野に立った予算編成を行った。施設・設備の定期的な点検並びに不備な箇所の早期発見・早期対応を行った。 ⑤ 勤務時間外の在校時間が月８０時間を超えた職員については、産業医との面談を推奨した。 ⑥ 年に３回実施する校内研修のみならず、時機を見て、企画調整会議及び職員会議で、事故の具体的事例や未然防止策を提示した。 ⑦ ２０周年行事を厳粛に挙行すると共に、文化部に属する生徒の成果発表とネパール国籍の在京生徒の

		民族舞踊の披露を行い、生徒の自己実現の場とした。
イ　パラダイムシフトに対応した安心・安全な学習環境づくり【A】	① パラダイムシフトにおける授業のあり方を考慮し、オンライン学習デーを活用してのオンライン学習、ＩＣＴを活用した学習を実践する。 ② やみくもにコロナ前に戻すではなく、学校の状況や取組みを考慮した学校活動を実施する。	① ５月１日にオンライン学習デーを実施して、オンラインによる学びを継続することができるスキルの維持・向上に努めた。オンデマンドで授業を行った教員もいて、それか長期休業中の講習に活かされた。 ② コロナ対応のままになっていた始業時間の見直しを図った。その際、ただ単にコロナ前に戻すのではなく、丁寧な遅刻指導や欠席者対応ができる時間をとれるように配慮した始業時間とした。
ウ　カリキュラム・マネジメントを意識した教育課程の編成【B】	① 生徒の自己実現の後押しとＰＤＣＡを意識した教育課程の編成を行う。 ② 全教科・全単元のルーブリックの作成と教科毎に評価規準を統一した観点別評価を行う。	① 特に文系大学進学希望者の自己実現の可能性を高められるように教育課程を一部改訂した。 ② 観点別評価について、教員も生徒も納得でき、授業改善と学習改善を各々が意欲的に進められるように評価する材料や評価の方法を引き続き検討していく。
エ　Tokyo スマート・スクール・プロジェクト（学び方・教え方・働き方の三大改革）の実現【B】	① ＩＣＴを最大限に活用し、密度の高い教育活動を行うため、Microsoft Office365 を活用した、学校評価やアンケート集計等の実施や部活動指導員などのアウトソースの活用を行う。 ② 働き方改革により有給休暇１５日以上の取得を推奨する。 ③ 産業医と連携した健康状況の把握と自己管理の支援を行う。	① 学校活動における Office365 の活用が当たり前の状況になりつつある。 その他、年度途中から職員会議のペーパーレス化を実施し、電子起案率はほぼ１００％を達成できた。 ② 年次休暇の平均取得日数は１７日、平均取得率は４９％であった。 ③ 年１２回、安全衛生委員会を開催し、教員の健康状況について、産業医と共有し、助言・指導を受けた。
オ　特色化を意識した教育課程の編成【B】	① 総合学科の特色を生かし、個別最適の学びの場を提供する。 ② 生徒が自分の生き方を考える手助けとして、外部人材を活用した事業を多く取り入れる。	① ２年次において、リクルート社のスタディ・サプリを導入した。長期休業中の課題として、学習到達度を把握するツールとして利用し、個別最適の学習が促進された。次年度も

	③ 「産業社会と人間」「総合的な探究の時間（「人間と社会」）」における、ＳＤＧｓも意識した体験活動を実践する。 ④ 主体的・対話的・深い学びによる「課題研究」（「総合的な探究の時間」）を中心とした全校体制による探究活動を充実させる。 ⑤ 国際交流に係る事業を活性化させ、在京外国人生徒が、主となって活躍できる場も創出する。	２・３年次で継続活用する。 ②③④ １年次の「人間と社会」で、外部と連携した体験活動を、８講座に分けて実施した。うち５講座が、SDGs に関わるもので、成果発表会も開催して１年次生徒全員に共有させた。また、２年次の「サクセス・プランニング」で、外部と連携して、プレ課題研究を実施したが、成果は今ひとつであった。３年次の「課題研究」では、担当者任せのやり方を改善することができなかった。次年度は、さらに有為な外部団体を発掘して、生徒にとっても教員にとっても実りあるものにする。 ⑤ 国際交流に係る事業は、コロナ前の頃と、ほぼ同水準に戻った。また、韓国の高校と新たに姉妹校提携を交わし、次年度、交流の機会を拡大させる足掛かりをつくった。また、２０周年行事の中で、ネパール国籍の在京生徒が民族舞踊を披露する機会を設けた。

（２）学習活動

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア 「東京型教育モデルの実現」【B】	① 生徒の思考力・判断力・表現力を高めることを意識した主体的・対話的で深い学びを実践する。 ② 上記の授業改善を推進するために、外部も含め、授業研究の場への参加を督励する。 ③ Teams や Forms 等の Office365 を活用した授業を実践する。 ④ 採点処理や成績処理の負担を軽減するために、統合型校務支援システムを幅広く活用する。	① 対話的に授業改善指導を行い、主体的・対話的、深い学びの促進を意識して授業を実践する教員が増えた。今後は、単なるグループ学習になっていないかどうかなどを検証する段階に入る。 ② 若手教員２名が、定評のある他校の授業実践を視察した。また、中堅・若手教員各１名が授業参観プログラムの研究授業を行った。 ③ 授業内で、One Note を活用する教員が、多教科にわたって増えた。 ④ 昨年度は０名だったが、今年度は、

		多くの教員が、採点や観点別評価に統合型校務支援システムを活用するようになった。
イ　新学習指導要領に対応した授業展開 【B】	① 単元ごとに、「何ができるようになるか」を設定し、教科内での共有を図る。 ② 観点別評価を含めた学習評価の規準の統一するために、同一の科目担当者における評価規準と定期考査問題の共通化を図る。 ③ 新たな科目に対応した教材研究の充実を図る。	① 評価の３観観点のうち、「学びに向かう力」の評価について、基準ややり方を引き続き検討して、改善を続ける。 ② 定期考査の共通問題化が進んだ。今後は、すべての教科・科目で共通問題化し、観点別評価おける規準の統一を図る。 ③ ２年次の選択科目に「数学Ｃ」を導入した。次年度は、大学入学共通テストに課される「情報」への対応の検討が必要である。
ウ　学力向上に向けた組織的、継続的な取組み 【A】	① 習熟度及び少人数授業、夏期講習等により、個々の生徒の学力や進路希望先に合わせた学習指導を推進する。 ② 入学時からの学力の定点観測とデータベースの活用により、個々の生徒の状況や進路希望の共有し、生徒の自主的な学習の習慣（毎日 60 分以上）づけを指導する。 ③ 授業のプロとして、寝かせない授業、他教科の学習をさせない授業を実践する。 ④ 中堅・若手教員による研究授業を活用して、授業参観及び授業研究の場を設定する。	① 英語、数学において習熟度並びに少人数授業を展開した。また、生徒の学力や希望進路に合わせた夏期講習や土曜講習を実施した。次年度は、日本語指導が必要な生徒に対応した学習指導ができるよう、また、毎年度、安定して講習を開講できるように組織化を進める。 ② 外部機関と連携して、模擬試験等の分析結果を共有した。１・２年次は、教科ごとの学力の変異に注目し、当該教科担当者が、その対策を共有・実践した。３年次は、志望する大学の合格の可能性について、受験パターン別に割り出し、その情報を、進路相談部と担任団が共有すると共に、当該生徒や保護者に対する助言の参考にした。次年度も、分析会を開催するが、教科担当者をはじめ、より多くの教員が参加することが課題である。 ③ 授業観察等を通して、寝かさない授業や他教科学習をさせない授業が実践されているか確認し、場合に

		よっては対話的に指導を行った。 ④ 若手研修の受講者５名、中堅教諭資質向上研修の受講者２名を中心に、授業研究を実施した。
エ　ＡＩ時代に対応した学力の育成　【B】	① 全ての教科において、読解力の育成を意識した授業を実践する。 ② 読書活動やビブリオ・バトルに係る取り組みを通して、思考力・判断力・表現力・創造力を育成する。 ③ スマート・スクールを意識したタブレット端末等を活用したり、Teams等を活用したりする授業を実践する。 ④ そのために、実践例を共有することを目的とした教員全員参加の校内研修を実施する。	① 思考力・判断力・表現力を総合的に磨くことを意識して授業を実践する教員が増えた。 ② 図書館の利活用推進を担当する教員を中心に、ビブリオ・バトルを実施し、代表者が東京都予選に参加した。次年度は、より規模の大きい取組にする。 ③ 授業内で、One Note を活用する教員が、他教科にわたって増えた。 ④ One Note の実践事例を共有する校内研修を実施したが、参加者は少数で、その意識は高いとは言えない状況であった。
オ　英語の４技能をバランスよく育成し、将来国際社会に貢献できる人材の育成　【B】	① オンライン英会話を活用して、「聞く」「話す」力を育成する。 ② ＪＥＴを活用して、現代英語として適切な表現ができる力や、的確な文章表現力を育成する。 ③ ＴＧＧ（Tokyo Global Gateway）を活用して、アウトプットする体験の場を設定する。	① １年次を対象にオンライン英会話を実施したが、十分に活用できたとは言えない状況であった。次年度は、意識の高い生徒を中心に、より効果的な取組みにする。また、海外学校間交流推進校として、GTECの実施も前向きに検討する。 ② 授業内の活以外にも、スピーチ・コンテストの審査員を務めるなど、生徒の英語力を高めることを目的とした行事にも積極的に活用した。 ③ １年次生徒が、１１月に、アウトプットの機会としてＴＧＧを利用した。次年度以降も継続する。
カ　個に応じた学習指導の充実　【B】	① 生徒個々の自己実現を目指して、少人数授業を実施する。 ② 外部人材を活用したものを始め、各種の土曜講習を実施する。 ③ 日本語指導が必要な生徒に対して、外部人材も活用した日本語指導の場を充実させる。	① 大学進学を目指す生徒や日本語能力を向上させたい生徒など、多様なニーズに合わせ、少人数の授業を開講した。次年度は、取組の組織化を推し進める。 ② 予備校と連携した英語土曜講習を実施し、夏季休業中にも、その枠

	④ 外部と連携して、ｅラーニングサービスを活用した自主学習や反転学習を行えるようにする。 ⑤「課題研究」を作成させる際の個別指導により、生徒のプレゼンテーション能力を育成する。	を広げて実施した。 ③必ずしも多いとは言えない外部人材であるが、何とか確保しながら、取り出し授業や日本語指導の場を創成した。次年度以降、日本語の指導ができる外部人材を安定して継続的に確保することが課題である。 ④ ２年次において、リクルート社のスタディ・サプリを導入した。長期休業中の課題として、学習到達度を把握するツールとして利用し、個別最適の学習が促進された。次年度も１・２年次で継続して活用する。 ⑤「課題研究」の肝であるリサーチ・クエッションづくりについて、２年次の３学期に、外部団体と連携した添削指導を実施した。次年度は、２年次に加え、３年次でも、外部団体の添削を受けられる機会を設ける。

（３）進路指導

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア　１学年からの系統的・組織的な進路指導 【B】	① 高校３年間を見通して、目的と内容、実施時期を精査しながら、外部と連携した進路ガイダンスを実施する。 ② データベースを活用した生徒情報（進路希望についての現状や見通し）について、担任や教科に提供して共有する。 ③ サクセス・プランニングを中心とした自己理解、職業観の育成、将来につながる科目選択指導を充実させる。	① 現役合格者による卒業生講話や進路ガイダンスを通じて、目標達成に向けたモチベーションの涵養をすることができた。 ② 外部機関と連携して、模擬試験等の分析結果を共有した。１・２年次は、教科ごとの学力の変異に注目し、当該教科担当者が、その対策を共有・実践した。３年次は、志望する大学の合格の可能性について、受験パターン別に割り出し、その情報を、進路相談部と担任団が共有すると共に、当該生徒や保護者に対する助言の参考にした。次年度も、分析会を開催するが、教科担当者をはじめ、より多くの教員が参加することが課題である。

		③ サクセス・プランニングでの履修指導に加えて、担任団のきめ細かな個別面談により、科目選択指導をおこなった。
イ　各種の講習の充実　【B】	① 各教科で講習内容を検討し、進路相談部を中心に全校体制での効果的な講習を実施する。 ② 予備校と連携した英語の土曜講習と連動させ、他教科の講習も実施する。 ③ 大学受験に限らず、公務員や看護医療系の志望者、検定試験の受験希望者に対する講習についても企画する。	① 長期休業中のみならず、週休日や平日の早朝・放課後など、生徒のニーズに合わせ講習を実施した。しかし、個に拠るところが大きく、組織的とは言い難い取組であり、毎年度、同じ内容の講座が同じ数、開講されるように組織立てる必要がある。 ② 予備校と連携した英語土曜講習に合わせ、時間帯を変えて、数学や日本史の土曜講習が開講されたが、個に拠るところが大きく、組織的とは言い難い取組であり、毎年度、同じ内容の講座が同じ数、開講されるようにする一方、開校する教科・科目を増やす必要がある。 ③ 単発的な実施になり、継続した取組はできなかった。
ウ　面談の充実　【B】	① 生徒のみならず、保護者とも情報の共有化を図ることを目的にして三者面談を実施する。 ② 大学の一般受験を目指す生徒のモチベーションを下げさせないために、定期的な面接等を実施する。	① ３年次は、ほぼ全員が三者面談を実施し、特に進路希望に係る意向を共有することができた。 ② 外部機関と連携して、３年次生徒の志望大学の合格可能性を、受験パターン別に割り出し、その情報を進路相談部と担任団が共有すると共に、当該生徒や保護者に対して助言することにより、結果にも繋がった。しかし、定期的な取組とは言えなかった。
エ　キャリア教育の重視　【B】	① 生徒自身の興味関心と、自分自身の将来に関わることを題材にした「課題研究」の指導をするとともに、研究内容・発表活動を充実させる。 ② 進路実現や自己実現にも繋がるよう地域と連携した「人間と社会」を充実	① 「課題研究」の肝であるリサーチ・クエッションづくりについて、２年次の３学期に、外部団体と連携した添削指導を実施した。次年度は２年次に加え、３年次でも、外部団体の添削を受けられる機会を設ける。

	させる。 ③ 多様な大人と出会わせ、いろいろな価値観を生徒に知らしめ、自分の生き方を考えさせる機会を創出する。	②③ １年次の「人間と社会」で、外部と連携した体験活動を、８講座に分けて実施した。成果発表会も開催して１年次生徒全員に共有させた。また、２年次の「サクセス・プランニング」で、外部と連携して、プレ課題研究を実施したが、成果は今ひとつであった。次年度、さらに有為な外部団体を発掘して、生徒にとっても教員にとっても実りあるものにする。

（4）生活指導

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア　杉総の特色ある生活指導の充実　【B】	① 教育のプロとしての誇りと自覚を基に、深い愛情をもって生徒一人一人の理解に努め、毅然とした粘り強い指導を実践する。 ② 全ての教員による、ぶれない指導を共有して実践する。 ③ ノーチャイム制など、時間の自己管理を重視していることから、遅刻指導を始めとする授業規律確立の指導を徹底する。	①② どの教員でも、どの生徒に対しても、どのような状況であっても、同じような指導をするという意味での「ぶれない」ではなく、生徒と良好な人間関係を築きながら、教員相互がフォローし合って、状況に合った指導をするという意味での「ぶれない」指導を実践中であり、継続していく。 ③ 生活指導部及び担任団が、間をおかず、きめ細かな指導ができるように、始業時間に余裕をもたせた。また、次年度は、生徒個々との面談を十分に行えるように、年間行事計画における期間にも余裕をもたせる。
イ　ＳＮＳの適切な利用促進に関する指導の徹底　【A】	① 生徒が意図せずにトラブルに巻き込まれたり、他者を傷つけたりすることのないよう、集会などを利用して、ルールの周知徹底を図る。	① セーフティ教室や学年集会において、また、情報の授業の一環として、ルールやマナーを周知した。
ウ　体罰根絶といじめの事前防止・早期発見・早期対応の徹底　【A】	① いじめ防止アンケートを年３回、体罰防止アンケートを年１回実施するとともに、特に部活動において顧問教諭と外部指導員とが連携して体罰を根絶する体制を構築する。 ② アンケートの結果により、いじめが	①② いじめ防止アンケートを３回、体罰防止アンケートを１回実施し、記述内容によっては生徒からの聴き取りを実施した。課題として残るものは見受けられなかった。

	発覚した場合には、いじめ防止対策委員会を速やかに招集し、初動対応によって重大事案にならないようにスクール・カウンセラーを含めた全教職員で行う組織的な対応を行う。	

（５）特別活動・部活動

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア　学校行事・生徒会活動を通した生徒の主体性の育成【A】	① 三大行事（体育祭・杉総祭・合唱祭）において、生徒が、達成感、自己肯定感を得られるように、生徒の自主性を生かしながらの企画・運営を行う。 ② 学校行事において、生徒一人ひとりが、それぞれの特性に応じて活動できる場を創出する。 ③ 生徒会を中心にした特別支援学校や小学校との連携事業を発展させる。 ④ 生徒会を中心にしたユネスコスクールとしてのESD活動、美化活動を推進する。 ⑤ 周年行事において、学校関係者が一堂に会する中、高い達成館や自己肯定感、一体感を得られるように企画・運営する。	① 生徒が、学校行事などの企画や運営に主体的に取り組めるように支援を行った。 ② 文化祭をはじめとした学校行事の中で、HR単位のみならず、部活動、選択講座・生徒会や委員会・有志等、多様な形で自己実現できるように配慮した。 ③ 特別支援学校と、複数の部活動が交流を実施した。小学校の交流は、今年度は復活できなかった。次年度は、交流の幅や機会を増やす。 ④ ESD活動、美化活動の推進はいまひとつではあったが、能登半島地震災害支援のための募金活動を商店街で実施したり、警察署と連携したセーフティ教室の進行を務めたり、生徒会役員を中心に活躍した。 ⑤ ２０周年行事を厳粛に挙行すると共に、文化部に属する生徒の成果発表とネパール国籍の在京生徒の民族舞踊の披露を行い、生徒の自己実現の場とした。
イ　部活動を通した健全育成【B】	① 勝利至上主義に陥ることなく、生徒が、達成感を得られることと部活動と学業を両立させることを大切にした、文化・スポーツ推薦に頼り過ぎない部活動の運営を行う。 ② 部活動において、生徒一人ひとりが、それぞれの特性に応じて活動できる場を創出する。	①④ 単に競技力が高いだけでなく、部活動と学業を両立させるように努力し、学校活動や地域の活性化に貢献している部活動や、その生徒を表彰の対象にするなど、みんなの前で褒め称えた。 ② 多様な学校行事で、様々な部活動が発表できる場を準備し、数多くの

	③ 「部活動に関する活動方針」等に基づき、週二日以上の完全休養日を設定するとともに、短時間で最大限の効果を上げられるよう活動方法等の工夫を行う。 ④ 部活動で地域の行事に参加するなど、生徒の自己肯定感を高められる社会貢献の機会を創出する。	自己実現の場を創出した。 ③ 部活動によっては、生徒の要望もあり、「方針」どおりの活動ができなかったところもあった。次年度は、学校として、あえて活動を停止する期間を設けるなど、「方針」の遵守と教員の負担減を図る。
ウ 「Tokyo Active Plan for students」を踏まえた体力向上 【B】	① 体育の授業や体育的行事、部活動の充実により、体力テストの結果を向上させる。 ② 運動を楽しみながら、自らの体力を高めていく習慣づけの指導を行う。	① 昨年度に引き続き、体力向上に向けた取組を実施した。 ② 体育の授業において、多種多様なスポーツに触れられる機会を設け、将来に渡って運動に親しめるように計画・実践した。

（6）安心・安全な環境作り

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア　心身の健康と安全に対する意識を高めた健全育成　【B】	① 地域と連携した総合防災訓練を行うことで、自助・共助の精神を培う。 ② 自転車使用に関する安全教育指導を行い、自転車通学者の保険の全員加入やヘルメット着用の指導を実施する。 ③ 発達障害等、特別な支援が必要な生徒に対して、合理的配慮に基づく適切な対応を実施するとともに、障害者への理解推進を図る。 ④ スクール・カウンセラーや養護教諭と連携を図り、定期的な教育相談委員会を実施することで、生徒のメンタル面でのサポートを行う。	① 地域の消防署や水道局との連携により、１年次を中心とした総合防災訓練を実施した。 ② ヘルメットの着用について、保護者会やセーフティ教室、新入生説明会などで呼びかけた。次年度も指導方法を工夫しながら、粘り強く着用を呼び掛ける。 ③④ 特別支援教育コーディネーターやスクール・カウンセラーと定期的な情報交換を行い、課題のある生徒の把握に努めた。また、外部機関にも参加を求め、ケース会議を開いて、対応の方向性を共有した。
イ　危機管理の徹底　【A】	① アレルギーや疾病のある生徒に関する情報を、校内で共有する。 ② 生命の危機に関する事故の発生が危惧される場合、スクール・カウンセラーを始め、シニア・スクール・カウンセラーや東京都教育相談センターなどの専門家を活用し、教職員全員全員参加の下、開催するケース会議で共	① 年度当初にアレルギー疾患のある生徒の情報を共有した。また、宿泊を伴う学校行事の前に、本人・保護者に改めて確認をとり、校内だけでなく旅行会社や宿泊施設とも連携して対応した。 ② 左記に加え、児童相談所の職員や医師などにも参加を求め、学校で

	有する。 ③ 学校事故の未然防止(リスク・マネジメント)と事故初動対応の重要性を理解し、授業や部活動等の体育活動中の事故を未然に防止するとともに、万が一事故が発生した際には、速やかな報告・連絡・相談体制によって、被害の最小限化を図る。 ④ 児童相談所や警察等と連携し、家庭内での虐待が予想される生徒の安全を確保する。	ケース会議を開いて、対応の方向性を共有した。 ③ 職員会議や服務事故防止研修等を通じて、平素からのリスク管理や事故発生時の迅速な対応及び情報の共有化の重要性を周知し、組織としての対応の仕方、報告・連絡・相談体制について徹底した。 ④ 外部の関係機関、スクール・カウンセラー、養護教諭との連携により、速やかに生徒の安全確保について対応することができた。
ウ　保護者との良好な「顔の見える」関係づくり【B】	① 保護者が安心して学校教育へ参画できるよう、保護者会を中心とした情報の共有化を図る。 ② 進路選択に向けた不安を取り除くための三者面談を全員に実施する。 ③ PTA との連携を充実させる。 ④ 学校評価アンケートによって、保護者の意向を把握する。	① 各学年において３回、保護者会を実施して、学校の状況や今後の予定などについて、その情報を共有し、理解を深めてもらった。 ② ３年次は、ほぼ全員が三者面談を実施し、特に進路希望に係る考えを共有することができた。 ③ 年間６回開催された学校連絡会に参加し、学校の状況を説明すると共に、意見や要望を伺う場をもった。 ④ 学校評価アンケートの結果を分析して学校活動に活かす。次年度は、保護者が回答しやすいように選択肢を改変すると共に、結果が保護者の目に触れやすいように工夫する。

（７）募集・広報活動

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア　組織的な募集活動の充実【A】	① 中学校及び塾を効率的に訪問し、本校の特色をＰＲする。 ② 年３回以上の学校説明会（合同説明会を含む）及び夏季休業中の学校見学会や部活動体験会を実施する。 ③ その際、学校行事として、全教職員が必ず関わりをもつようにして、全校体制の取り組みとする。 ④ 近隣の公立小・中学校への出前授業	①④ 中学校や地区毎に開催される説明会や出前授業に、数多く参加して、本校の特色について説明を行った。塾の訪問はできなかった。 ② 予定どおり、全て実施した。次年度は暑さ対策も考慮して、会場の見直しを行う。また、在京外国人枠での受検希望者を対象にして説明会の開催も検討する。

	や説明会、交流事業を計画的に実施する。	③ 実施時期や日時の兼合いもあり、全ての教員が関わることできなかった。次年度は、より多くの教員が、自分事として本業務に携われるように、計画の見直しを図る。
イ　ホームページを中心とした広報活動 【A】	① 学校のホームページの迅速な更新し、積極的に情報発信する。 ② 顧問と連携して、部活動に関する情報を積極的に発信する。 ③ 民間企業と連携した学校紹介動画を作成してアップする。	① 本校の様子を極力掲載することに努め、年間更新回数は４９７回にのぼった。 ② 特定の部活動のみ情報の発信があったが、数は少なかった。HP に掲載するノウハウを共有するために担当分掌の支援が必要である。 ③ 民間企業と連携して撮影や編集の支援を受け、動画を東京都教育委員会のＨＰにアップした。

（８）経営企画室体制

今年度の取組目標	具体的な方策	今年度の取組状況
ア　学校経営への参画　【A】	① 学校経営計画に基づき、学校経営に参画し、工夫を凝らした経営企画室運営を行う。 ② 教員と企画室職員が協働し、積極的な経営参画を図る。 ③ 働き方改革の一環として「費用対効果」と「時間対効果」を意識し、ＩＣＴを最大限活用して業務を遂行する。 ④ 学校の総合窓口として思いやりの心と品格を重んじ、全校の機能をスムーズに調整する。 ⑤ 業務全般を理解すると共に、担当部署のスキルアップと課題改善の意識を常にもち、組織的に業務改善を図る。 ⑥ 学校行事や保護者会活動等にも積極的に参画する。	①② 経営企画室職員の全員体制による学校経営への参画により、適切な予算執行ができた。 ③ ＩＣＴを最大限活用し、電子起案率は、ほぼ 100%を達成することができた。 ④ ワンストップサービスとして、経営企画室の窓口業務、電話対応について適切に実行できた。 ⑤ ベテランも若手も、経営企画室の職員全員が、業務改善を意識して、適切に職務を遂行できた。 ⑥ 学校行事等にも、経営参画の一環として、参加出来た。
イ　適切な予算執行　【A】	① 計画的な予算執行により、円滑な学校運営と予算の有効活用と一般需用費におけるセンター執行率の向上を図る。 ② 教員との連携により、中長期的な見通しに立った施設・設備・　備品等の更	① コロナ禍後、予算執行において、イレギュラーの対応が必要になることもあったが、臨機応変に対応することができた。 ② 中・長期的な視点に立った予算編

	新を図る。 ③ 施設管理において委託業者と連携し、適切な運営を図る。	成指針を策定したが、教科の予算を重視したため、一部購入できない物品があった。 ③ 委託業者との連携により、適切な運営を行えた。
ウ　関係団体との連携　　【B】	① PTA 等との積極的な連携を図り、校務運営を支援してもらう。 ② 同窓会と連携を図り、学校の適切な管理を行う。	①② PTA 及び桜友会、同窓会との連携により校務運営を適切に実行できた。次年度も、学校活動に理解と支援をいただけるように、真摯に対応する。

２　重点目標と数値目標

重点目標	具体的な数値目標	達成数値
生徒が毎日 60 分以上は家庭学習等を行うよう予習や復習を前提とした授業の実践	① 授業以外の学習時間 60 分以上　３０%以上 ② 学校図書貸出冊数の増加　３冊／１人・年	１９% ２．１冊
組織的・計画的な進路指導及びキャリア教育の実践	① 進路相談への肯定的評価　８０% ② 進路の第一志望達成率　８６% ③ 大学入学共通テスト受験者数　８０名 ④ GMARCH 合格者数　１０名 ⑤「産・社」「人・社」「課題研究」の肯定的評価　８５% ⑥ 外部人材を活用した取り組み　１０件	８５% ９１% ３２名 ５名 ７５% 件
生活指導及び安心・安全な環境づくりの実践	① 遅刻率（1 日平均）の改善　１．０人以下／HR ② SNS ルールに関する指導の徹底　４回 ③ 学校事故未然防止に係る校内研修の実施　３回	１，４人 １回 ３回
	① 海外留学生等の受け入れ　７件 ② 学力検査最終応募倍率　１．３倍 ③ ホームページの更新回数　３２０回 ④ 東京都統一体力テスト　東京都平均以上 ⑤ 杉総通信の年間発行回数　１０回 ⑥ 部活動参加率（1・2 年次）　９０% ⑦ 月当たり定時外勤務時間が 45 時間を超える教職員　０人	１１件 １．７倍 ４９７回 平均以上 １１回 ８０% １４人

３　次年度に向けた課題と対応策

（１）授業力の向上

ア 主体的・対話的、深い学びを促進する授業の充実

イ 一人１台端末を効果的に活用した授業の充実

ウ 今の学びと将来との繋がりを意識させる授業の充実

エ 大学受験対応を目的とする講座の、生徒の目標を達成させる授業の充実

オ 多様な実践事例を共有するための校内研修の参加者の増加

（２）「日本語指導が必要な生徒」への対応

ア 対応の方向性や実践事例を共有する校内研修の実施

イ 選択科目の設定などの教育課程の見直し

ウ 学校説明会の開催やリーフレットの配布など募集対策の充実

（３）方向性を共有したうえでの生徒に寄り添った生活指導

ア 生徒と良好な人間関係を基にした、状況に応じた指導の充実

イ 担任団を中心にした個人面談の充実

ウ 生徒の生命を守るための指導の充実

（４）ワンランク上を目指した進路指導

ア 長期休業中や週休日に実施する講習の充実と組織化

イ 学習到達度テストや模擬試験の３年間のトータルした計画の作成

ウ 外部機関と連携した生徒個々の状況を把握する校内研修の参加者の増加

（５）外部機関と連携した効果的なキャリア教育の推進

ア 外部機関を活用した、生徒・教員の双方のためになる「サクセス・プランニング」の充実

イ 外部機関を活用した、生徒・教員の双方のためになる「課題研究」の充実

（６）学校の特色化の推進　～海外学校間交流推進校の特典の活用～

ア オンライン英会話事業の効果的な活用

イ 生徒の英語力を把握する事業の効果的な活用

（７）働き方改革の推進